

セタカミズオオバコの観察 (第2報)

大滝末男・釘嶋善治

まえがき

セタカミズオオバコはミズオオバコ *Ottelia alismoides* (L.) Pers. に類似するが、沈水植物としては、頗る大型の水草である。これについては、大滝が本会報 No.5 (1981) に紹介した。和名はその時大滝が与えたものである。しかし、その存在を最初に確認したのは、筆者のひとりである福岡県山門郡瀬高町に住む釘嶋である。セタカミズオオバコは昔から現地では、カラフズキ、ミズオオバコの方はカワフズキとよび、両者を区別しており、釘嶋佐吉 (82才) によれば、幼少の頃 (70年以上も前) から、前回報告した場所に両者とも生育していたとのことである。筆者らは1982年9月23日に現地を再調査し、大滝は開花中の生品数株を東京に持ち帰り、水槽で、全草が完全に枯死する11月末まで観察した。今回の調査で、いくつかの新しい所見がえられたので、ここに報告する。

(1) 生育地

セタカミズオオバコが多産する水域は、瀬高町の北東部を南下する矢部川の左岸に広がる水田地帯の一画である。下長田とよぶ部落の小水路中で、毎年200~300株ぐらい繁殖する。ここでは長さ約600m、幅2~3m、水深30~100cm、水底は泥土、流速は0.05~0.30m、平素水はほぼ透明である。瀬高町の南西部には、3ヶ所 (浜田・井手の上・三満) ほど、別に数10株生育しているところがあり、そこでの生育

状態も、毎年ほぼ同様で、分布は拡大もしないし、特に縮小することもないようである。さらに、瀬高町以外の水域では、釘嶋が1979年9月に、佐賀県内の城原川左岸の水田地帯の水路で、わずか1か所に数株生育しているのを確認しているだけである。

下長田地区の水路は、第1図に示す通りであるが、同水路にはマツモとクロモが多産し、ミズオオバコ・ヒルムシロ・コウホネ・キクモ・ウキクサ・アオウキクサの水草のほかには藻類のアオミドロなどもみられる。これらの植物が繁茂すると、水流の滞りをきたすので、農家では毎年8月下旬と9月下旬に、鎌で水草を刈り取る藻切りとよぶ除草作業が行なわれているが水草類は一時的に減少するだけである。なお、下長田地区は、2~3年後には耕地整理されることが内定しており、この水路中にみられるセタカミズオオバコは、近い将来絶滅する運命にあることが予想される。

(2) セタカミズオオバコの形態

a. 根。ミズオオバコと同様に白色のひげ根をもつ。根部の比較では両者には相異点が見い出せなかった。根

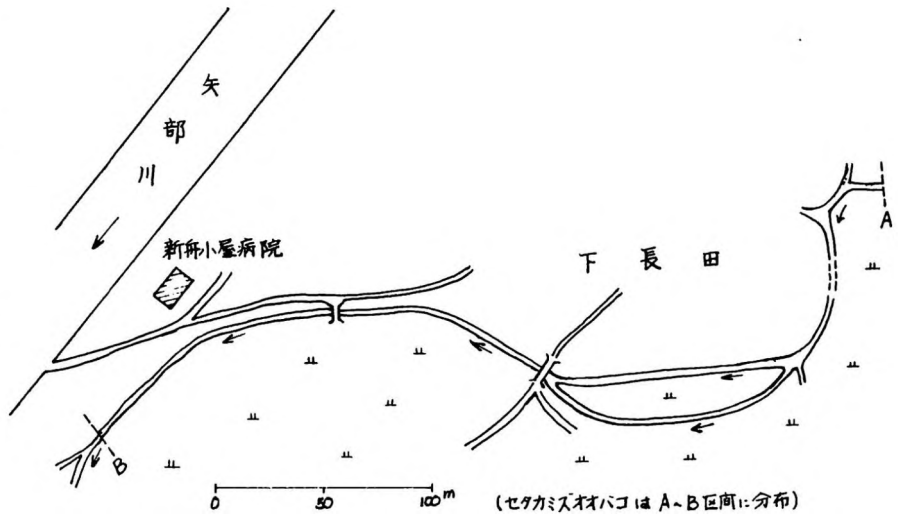


図1. 下長田地区の略図

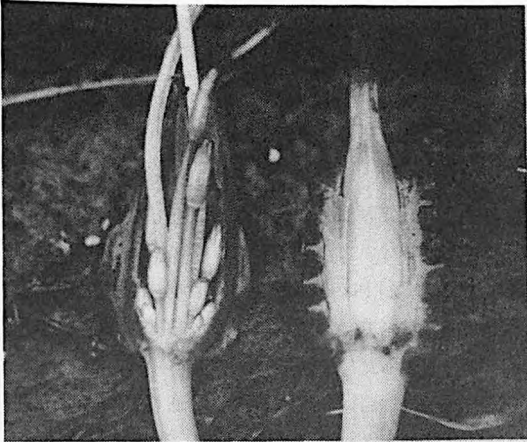


図2. 包鞘内のつくり

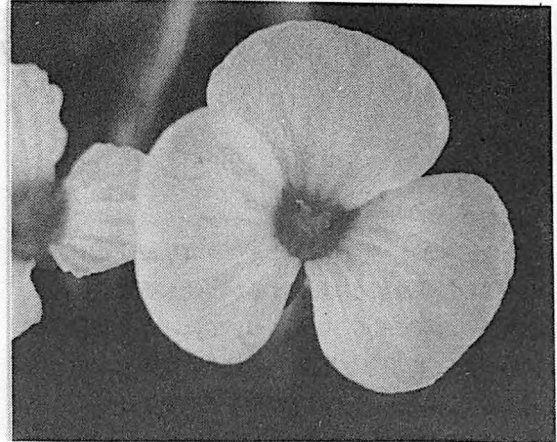


図3. セタカミズオオバコの花

は12月初旬までには茎葉部と共に完全に枯死する。

b. 茎。ミズオオバコと同様、ほとんど無茎で、株の基部に珠芽などの越冬芽らしいものはできない。

c. 葉。1株より20-30枚の葉を根生する。葉柄は短い、成長とともに長くなり、成長葉では、長さ40~80cmで、ときにはややねじれる。葉柄の横断面は、ほぼ二等辺三角形で底辺の長さ3~8mm。葉身は若葉の頃は長ひ針形であるが、成長葉では淡褐綠色、広卵円形で薄くて軟質、長さ12~17cm、幅5~11cm、表面の葉脈は中央脈の両側に3脈ずつあり明瞭。裏面は中央脈がやや隆起して特に顕著である。

d. 花。花期は9~11月。これまでに観察したものはすべて雄株だけで、雌株は1株も見えていない。雄花のつぼみはトチカガミ同様に筒状の包鞘 (spathe) 内に多数生ずる。包鞘は9月初旬から、順次10数個根出し、1個の包鞘内に雄花のつぼみを多数 (12~73個) 生ずるが、ふつう20~30個できる。成熟した包鞘はほぼ三角錐状で、長さ3.5~7.5cm、幅1~5cm、表面は淡綠色平滑で、縦に翼が3~7個あるも、ふつう4~5個。翼の幅は2~5mm、縁辺は平滑であるが、水流の速いところのものは、やや歯牙状の鋸齒がある。雄花は包鞘内から、順次1~3個出るが、雄花の花柄は白色円柱状で、長さ3~5cm、径約2mm。花は一日花で、花径4~6cm、水面上に抽出して夕刻まで開花するが、水面上に多数花を見る景観はなかなか見事である (図2・3参照)。

e. 雄花のつくり。がく片3個、淡緑白色、狭楕円形で舟型、長さ12~14mm、幅3~4mm。花卉3個、広倒卵形、で膜質、周辺は淡紫紅色で下方は白色、長さ3cm、

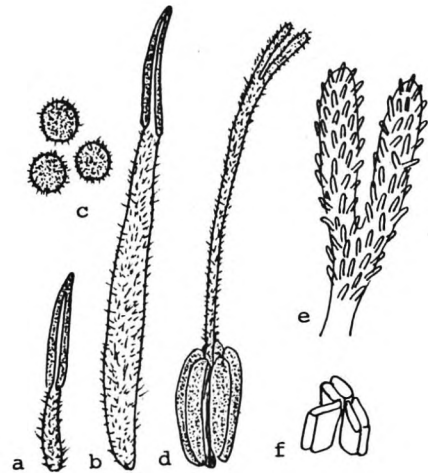


図4. a. おしべ (小)、b. おしべ (大)、c. 花粉、d. 仮おしべ、e. 同先端部の拡大、f. $[G_3]$ の痕跡

幅4cm、表面やや波状、濃紫色の7脈があるも、中央の5脈は明瞭。雄しべは外側から小6個、大6個それぞれ2輪生し、中心部に仮雄しべ (staminodium) 3個がみられる。短小の雄しべの花糸は、長さ3~4mm、幅約1mm、葯の長さ3~5mm、長大の雄しべの花糸の長さは7~10mm、幅約1mm、葯の長さ3~4mm、仮雄しべの花糸の長さ8~12mm、幅0.2~0.3mm、葯は2裂して柱頭状で花粉は作らず、長さ2~3mm、これらの雄しべ群の表面にはいずれも微毛を密生する。花粉は大小12個の雄しべの葯に生じ、濃黄色で球状、径約300 μ 、表面に微齒を密生する。なお、雄花の中心の基部には、心皮の痕跡と考え

られるものが3個あり、淡黄色で高さ2mm、幅0.5mmで、相互に接触して位置する。したがって、雄花の花式は、 $K_3 C_3 A (3+3) + (3+3) + (3) [G_3]$ となる。但し、(3)は仮雄しべ、 $[G_3]$ は心皮の痕跡である(図4参照)。

(3) 考察

セタカミズオオバコについて、過去3年間の観察結果について筆者らの考え方を順不同に列挙すると、次のようである。

- セタカミズオオバコは、大滝が本会報に報告するまで、全く記録されていない可能性が高い。
- 前会長の原田市太郎が1950年頃、宮崎県下で入手し、名古屋大学の研究室の水槽で、2~3年間栽培したセタカミズオオバコに類似の水草は、セタカミズオオバコと若干異なる点がみられる。
- 文献(Dandy 1934 & 35; den Hartog 1957 &

72; 李 1981)で、セタカミズオオバコに該当する水草を探してみたが、今日まで該当するものが見当たらない。強いて学名を与えるならば、ビルマ・ベトナム・海南島などに分布する *Boottia cordata* (Wall.) Dandy, 中国名で水菜花があるが、若干の疑問点があり、学名の決定は、いまだに到達していない。

d. セタカミズオオバコを最初に見たとき、帰化水草であろうと考えたが、かなり以前から局在している在来種である可能性もあると考えられる。

e. 繁殖方法には、いろいろな問題があり、これについては今後ともさらに観察・研究を続けてゆきたい。最後に、今回の現地調査に当り、地元の益村聖ならびに長田武正ご夫妻らが雨天の中を同行されたこと、生品の観察や文献の提供で、原田市太郎、大場秀章、文献の提供で田中啓幾・角野康郎の諸先生に多大のご協力を頂いたことを付記し、ここに厚く御礼申しあげる。

1983年1月30日記

○沖 陽子「水生雑草ホテイアオイの環境要因に対する生育反応及び繁殖力に関する研究」

(1982年、A4版184頁)

著者がこれまでに行なってこられたホテイアオイに関する研究を、京都大学農学研究科の学位論文としてまとめ、公刊されたものである。著者の沖さんは、日本でホテイアオイの本格的な研究に取り組まれた最初の人と申し上げても差しつかえなからう。今、その成果が一冊にまとまったわけである。

その内容の一部は、既に独立した論文として「雑草研究」等に発表されているが、この学位論文の講成を見て、10年近いこれまでの研究が、全体を見渡した周到な研究計画のもとに進められたことがよくわかる。ホテイアオイを調べておられる方には言うまでもなく、他の水草と取り組んでおられる方にもひとつの模範になりそうである。目次の主要部分を紹介しておきたい。

第1章 水中の栄養塩と生育及び繁殖との関係

- 要素欠除の影響
- 窒素が生育・繁殖に及ぼす影響
- リン並びにカルシウムが生育・繁殖に及ぼす影響

第2章 温度と生育及び繁殖との関係

- 実生株の生育特性
- 成株の生育特性
-

低温に対する生育反応

第3章 自然水域における生産量及び群落構造の解析

1. 個体群の生長と群落の動態
2. 水系別生産量と窒素及びリン吸収量

第4章 種々の生息地における適応力

1. 種々の育成状態における生育特性
2. 種々の育成状態における組織学的研究
3. 種々の育成状態における種子繁殖

第5章 総合考察

(角野)

○ホテイアオイ研究会 Newsletter No.1 (1982年11月、12頁)

昨年7月に発足したホテイアオイ研究会の会報第1号である。ホテイアオイだけ対象としたこのような会の設立は、植木邦和会長をはじめ、この会の創立に尽力された方々の、ホテイアオイにかける並々なぬ意欲があったことである。その発展を祈りたい。言うまでもないことだが、このような研究会の発展は、具体的な研究の充実した展開があってはじめて可能なのであって(同じことは水草研究会にもいえる)、研究者相互の情報交換や海外の研究事情の紹介の場となる会報の役割は小さくない。(3頁右下へつづく)